平成 30 年度第３回浦安市生涯学習推進計画策定懇談会

第２回分科会（学びの推進）　議事要旨

日時：平成 30 年 10 月 12 日（金）
午後４時 30 分～６時 30 分
会場：市役所４階Ｓ６会議室

＜出席委員＞
関谷　　昇　分科会長
藤田　　朗　委員
上野　実千代 委員
登内　　明　委員

＜欠席委員＞
吉野　　忍　委員

＜議　事＞
１．開会
（１）分科会長あいさつ
２．議事
（１）課題・問題提起、方向性の確認
（２）具体的な取組案について
３．その他
４．閉　会

＜配布資料＞
【資料】学びの推進分科会からの提言（案）
【資料】次期計画の課題と方向性に関する議論のまとめ（仮称）
【資料】第１回分科会（学びの推進）　議事要旨

１．開会

関谷分科会長よりあいさつが行われた。

２．議事

（１）課題・問題提起、方向性の確認

事務局より議事（１）について、資料を用いて説明が行われた。

（委　員）　関心の度合いに応じた多様なアプローチは、現状で具体的な取組が行われていないから挙げられているのか。

（委　員）　アンケート結果で、子どもからシニアの世代まで参加しやすくする必要があると出ているので、それに対応するものであると考えられる。

（委　員）　いろいろな学びの場があるが、市民の関心と結びついていないのではないか。市民の関心のレベルにもかなりの幅がある。

（委　員）　様々な市民が関心に合ったものを見つけやすくなっていることが重要である。

（委　員）　学びの場に関する情報が整理されていないと思われる。公民館活動でも学びの場があり、それも幅広い。市民大学とも関係も整理する必要があるかもしれない。

（委　員）　方向性の項目の中で、「リーダーが学ぶ機会を充実していく」は、（２）か（３）に入る項目ではないか。また、「活躍の機会を提供する」は、（３）ではないか。

（委　員）　方向性の項目は、提言案の上から、「関心が低い人」、「一歩目を踏み出そうとしている人」、「活動の楽しさややりがいを見出そうとする人」、「さらに学ぶ機会や活躍の機会を広げようとする人」という並びで活動段階に応じた施策に整理されている。

（委　員）　リーダーは特に重要で、すべてのことに関係してくると思う。新しい人が入りやすくなるためには、リーダーが団体に入る敷居を下げる役割がある。関心があるが一歩目が踏み出せない人に対しては難しいと感じている。情報があっても、一歩目にはならないのではないか。

（委　員）　学びの場を提供した上で、やり方がわからないのか、意識の上でつまずきがあるのかを知る必要がある。

（委　員）　団体に見学に来た人がいても、入会を決めるのは、人であると思う。リーダーや周りの人に、ウエルカムな雰囲気があるかどうか。楽譜が読めない人が音楽サークルに入ろうとした場合でも、初心者歓迎の雰囲気があれば入会することもある。

（委　員）　音楽団体に見学に来る人が思っていた内容と異なっていた場

合、自分は複数の団体とつながりがあるので、その人の希望に沿った団体を紹介する。知っている人がつないであげることで、団体に入りやすくなることはある。

（委　員）　人の背中を押すのは、情報ではなく、やはり人であると思う。どうすれば、そのような雰囲気ができるかが難しい。

（委　員）　団体について知ってもらうことも重要である。ユースオーケストラでは、ブログを頻繁に更新して、活動の様子がわかるようにしている。見学に行ってみたいと思っても忙しい人には、楽しそうな活動の写真や、舞台に上がっている様子、活動中にあった出来事などを、語りかけるように伝えることで、背中を押すことにもなるのではないかと考えている。ブログの更新は自分を中心に、事務局で相談して行っている。

（委　員）　そうした情報発信をするためにも、リーダーの意識が重要である。

（委　員）　団体の活動を見せるようなことは、（３）のマッチングに関わることかもしれない。地域活動の見える化が求められる。見た人が体験したくなる、参加したくなるような情報発信が必要である。

（委　員）　活動の見える化は重要と考える。一方で、団体側は、地域や施設のニーズを知りたいという思いがある。老人ホームなどの施設で演奏させてもらうことがあるが、どのようなものが好まれるかがわかると、マッチングに役立つのではないか。

（委　員）　高齢者施設などのクリスマス会で演奏することがあるが、演奏の質を求められる場合や、スキンシップ、参加型のものなど、多様なニーズがある。また、自分の団体は市民活動団体として声がかかること以外にも、知り合いとのつながりで声がかかることもある。市内には多くの団体があり多岐に渡っているため、対象を絞っていかないとまとまらなくなる。

（委　員）　協働と生涯学習の融合が必要になる。すべてを統合したものができるとよいが、難しいとは思う。

（委　員）　活躍の機会は（３）で整理したい。地域のニーズを把握し、整理、マッチングしていくが、広がりすぎないように留意する必要がある。（１）は学ぶ主体のことであり、様々なレベルがある。（２）は、推進を担う人材についてであり、環境を整えることが必要である。

（委　員）　まず、市民の活動の状況について知ることが必要である。その上で、体系的に学ぶことができる場があれば、人材育成につながることがあるかもしれない。

（委　員）　流れとしては、学ぶアプローチを豊かにする、学びと活動現場をつなぐ、現場の中で学びから実践へと促すという段階ごとの整理にしたらどうであろうか。市民の活動のバックアップ体制を整える」については、（３）に入ると思われる。

（委　員）　そのように考えるとすっきりする。生涯学習を協働に結び付けること。学びと出会い、学んだものを現場につないでいく。つなぐことに気づくことで、地域を担っていくことにもなる。

（委　員）　それでは現状の提言案を修正して、（１）については「関心の度合いに応じたアプローチ」とし、関心のレベルに応じた場や機会を提供することについて記載することとする。（２）は、「学びと実践をつなぐ人材と環境」とし、学びをさらに深めるために市民大学と連携することや、まちづくりに必要な人材を計画的に育成することについて記載する。また、人材バンクのようなものを作り、各担当者が情報を共有することで、人材の活用が進むと思うので、そのことについても触れてもよい。（３）は、「市民の活動と地域ニーズのマッチング」とし、地域の課題を掘り下げ、団体、市民など、活動する人たちが、地域の課題やニーズとうまくマッチングできように結びつけていくことについて記載する。団体側も活動を見える化し、横につながっていくことで、地域のニーズを知ることができ、活動が広がっていくことになる。

（２）具体的な取組案について

事務局より議事（２）について、資料を用いて説明が行われた。

＜（１）関心の度合いに応じた多様なアプローチ＞

（委　員）　（１）については、学習情報の交通整理が必要である。市民大学でも、もっと教養的なものを学びたかったという声もある。学びの場がいろいろあるので、公民館や市民大学、市の部署ごとにまとめて整理する。また、明海大学の公開講座や民間事業者のカルチャースクールなどもある。学びの場について事前に情報があれば、それぞれのニーズに応じた第一歩が踏み出しやすくなる。生涯学習と市民大学など、関係する課が協力して、情報を集約、分類して発信すればよい。市民大学も、まだまだ市民に知られていないと感じている。

（委　員）　民間のものまで含めてよいか。スポーツなどは民間を入れていくと、非常に数が多くなるのではないか。

（委　員）　ここで検討しているのは、行政の計画なので、公的なものに限定してもよいとも考えられる。

（委　員）　公民館や市民大学で学んでいても、まちづくりに貢献することまで意識していない人もいる。何か始めようとした時に、市民大学や公民館の役割について理解していると、半歩ぐらいは進んだ感じになる。

（委　員）　市民大学では、内容を紹介する冊子を二千部も作って配っているのに、なぜ知られていないのか。

（委　員）　高齢者を中心としていて、比較的若い世代には知られていないのではないか。

（委　員）　参加者もシニア中心になっている。レベルが高くてとっつきにくい印象を持たれている可能性もある。

（委　員）　リタイア世代が中心になっていると感じている。学習情報を広報することは重要である。スポーツだけでも、イベントや体育施設のコースなど多様にある。初心者は、どこで調べればよいかもわからない。文化からスポーツまで、幅広く知ることができるように統合されると内容も豊かになる。

（委　員）　市のホームページも、最近では市民目線でカテゴリー化されるようになっている。学ぶという視点で入っていくことができるようにして、市民活動やリーダーの研修などを選んで調べることができるようになるとよい。今は、発信側それぞれの目線で情報を出しているため、学ぶ側からはわかりにくくなっていると思われる。

（委　員）　市内の団体経由で周知を図ることも効果的である。様々な分野の団体に発信することで、つながっていくこともある。

（委　員）　「浦安カタログ」という、市内の文化や施設等を紹介している冊子が有料で出されている。

（委　員）　確かに、浦安の様々な情報が載っているが、その冊子は民間企業が出版しているものである。

（委　員）　関心があるが踏み出せない人に、例えば老人クラブや社会福祉協議会の会合等において、学習情報の発信ができると効果的でないか思う。

（委　員）　そういった、各団体のとりまとめをしている中間団体を通じて発信することはよいと思う。日々の活動の中で、中間組織が集

まった時に学びの場を伝えていくことで、すそ野が広がっていく。

＜（２）市民の学びの推進を担う人材育成と活躍の場づくり＞

（委　員）　活動の場を広げているために、誰がつなぎ役となるのがよいと思うか。

（委　員）　地域包括支援センターの人や社会福祉協議会の人などがつないでくれたことがあった。直接会うことで、情報が広がっていくと思う。施設とつながっている人に会って紹介してもらったこともある。自治会長などもつなぐ役割になると思う。

（委　員）　つなぎ役がいて、つなぐための環境も必要である。

（委　員）　つなぎ役として、どのような人が必要か。福祉分野のほかにも、教育では、学校支援コーディネーターも考えられる。市民大学の卒業生をボランティアとして位置付けていくこともできるのではないか。

（委　員）　市民大学では、例えば、身体を動かすことは順天堂大学の先生がコーディネーターをしているが、公民館でも同様のことは行われている。活動をつなぐ人材育成のためには、何が必要であるのか。魅力的な講座を作る中で、まちづくりに踏み出したい人が参加できるように位置付けていくことが大切である。公民館の講座のカリキュラムはどのようにして決めているか。

（事務局）　市の職員が企画していることが多いが、市民と協働で企画することもある。

（委　員）　公民館を利用しているサークルには、指導者がいる場合があるが、指導者が市民大学を利用したり、市民大学で学んだ人が指導者になるなど、人的交流をすることもよいのではないか。

（委　員）　公民館と市民大学の人的交流を増やしていくことで活動の場が広がっていく。公民館で学んだ人が市民大学で学ぶ、またその逆もあると思う。

（委　員）　公民館自体が、活動の場でもある。

（委　員）　学んだ人の情報を、行政が把握しきれていない状況もある。そのため、協働の相手がいないということになっていないか。人材バンクのような形で、共有することが必要かもしれない。

（委　員）　市民大学は、修了者のリストは持っているので、本人が情報を開示してよいということであれば、公開は可能ではないか。

（委　員）　データベース化することで、行政もアプローチできるようになる。すぐには難しくても、活動する人材の情報共有に向けた調査研究といった表現なら記載が可能ではないか。

（委　員）　卒業する時に、人材バンクに登録しておいて、イベントの時に案内を送るようにしてはどうか。

（委　員）　松戸では、里山講座を受講して卒業した人は、呼びかけて団体を作らせる取組をしている。学んだ人のメールアドレスを共有して、学びを経た人から公募するような使い方もできる。

（委　員）　スポーツ推進委員なども、オリパラ関係の活動における受け皿にするなど、別の機会に紹介して、受け皿を用意してあげることが考えられる。

（委　員）　公民館と市民大学の連携、活動する人材の情報共有と働きかけを位置付けることとしたい。

＜（３）市民の活動と地域ニーズのマッチング＞

（委　員）　中間団体を通じて発信できる仕組みづくりをする。活動している人から誘われることがポイントとなる。活動している人のＰＲも重要。また、地域ニーズを把握して伝えていくこと、地域の課題と、必要とされている人材がわかるようにすることが必要である。無関心層が多い、ということではなく、何が必要とされているかが知られていないことが問題かもしれない。

（委　員）　地域ニーズはどのようにして調べるか。

（委　員）　松戸市では、困難がある子どもを対象とした取組がいろいろありながら、なかなかその現状が変わらないことがあった。そこで、関係者が一堂に会する円卓会議を開催して情報の共有を図ったところ、子どもに対する支援は多いが、大人に対する支援が少ないことがわかった。共働きで子どもが一人になっている時間が多いことなど、どこにどのような問題があるかを互いに伝えることが必要であるとわかった。その中で、子育ての悩みを母親が通っている美容院がつなぐ、といった新たな連携も生まれた。様々な関係者がつながって、面的な取組になることが重要である。そのためには、段階的に進めていくこと、まずニーズを確認することが大切である。

（委　員）　地域ニーズは、公民館の館長はある程度知っているし、様々な情報が集まっていると思われる。ただし、活動そのものに手一

杯で、地域のニーズについての議論ができていないのではないか。

（委　員）　癒しの音楽についてのイベントを企画した時に、シニア世代をターゲットに議論していたが、社会福祉協議会の方が、子育て中の母親をターゲットにすべきとアドバイスをしてくれてありがたかった。やはり、地域で活動している人の声を集めることが重要と感じている。

（委　員）　地域の問題、課題を把握すること、そのためには、地域の声を拾うための場を作ることが必要である。情報発信は、中間団体から発信していくことを位置付けたい。

３．その他

提言の文案の作成は分科会長に一任されることとなった。

４．閉　会

以上